

日独交流 150 周年と奇跡の日本人



IMF-JC 事務局長
若松英幸

ドイツ人の一家を津波から救い、無事に祖国に送り届けた人々が「奇跡の日本人」と呼ばれ、ドイツで大反響を呼んでいる。シュピールベルクさん一家は、娘さんの結婚式を前に日本旅行を計画、父の好きな浮世絵に描かれた日本三景「松島」を旅行中の電車内で地震に遭遇、タクシーで仙台に避難する途中に巨大津波に流された。民家のフェンスに必死でしがみついていたが、力尽き濁流にのまれようとした瞬間、やはり津波で流されてきた庄司さんという男性に手をつかまれ、民家に引き上げられた。彼はドイツ人一家を調理台の上に押し上げ、自分は瓦礫で負傷しているのも構わず、布団を探してきて掛け、水につかっただま一晩中「頑張ろう、頑張ろう！」と声をかけ続けた。一家はその声に励まされ、寒さと恐怖の中を生きながらえることができた、と語っている。

避難所の人々は、言葉の通じない一家を4日間懸命に世話してくれた。偶然出会った羽賀さんは、自分の車で長く遠い雪道を新潟まで送っていったが、途中でガソリンが無くなって知人宅に連絡、知人は暖かい風呂や食事でもてなし、翌日一家を東京行きの新幹線に乗車させた。すべてを失い困窮する家族に3万円を手渡してくれた人、原発事故で東京を離れたドイツ大使館と懸命に連絡を取りパスポート発給に尽力してくれた人、様々な人々の善意のリレーで、一家は無事帰国することができた。

この話はドイツのテレビZDFで放

映され、大反響を呼んだが、娘のヨハンナさんは「暖かい日本人の心と、新潟へ向かう途中の、一面の雪景色は決して忘れることができない」と涙ながらに話していた。2011年は日独交流150周年の記念すべき年だったが、その記念誌によると、ドイツからの義援金は60億円を超えており、いまま増え続けているとのことである。我々の友好組織IGメタルも、1400万円もの義援金を即座に送ってくれている。

IGメタルのフーバー会長（IMF会長）は2月初旬、日独定期協議のため来日されたが、震災の復興状況視察と現地の仲間との懇談を希望され、連合宮城とJFE条鋼・仙台製造所を訪問した。連合宮城では、震災当時の被害状況や連合ボランティアの活動状況がビデオで紹介され、その後、松島から船とバスで仙台港の突端にあるJFE条鋼の工場に向かった。あたり一面廃墟と化し、敷地には未だに巨大な貨物船が放置されて津波の痕跡が残る中で、操業は再開されていた。壊滅的な被害から半年余りでの操業再開に対し、ドイツ側から、「費用はどうしたのか」「従業員はなぜそこまで献身的に努力できたのか」といった多くの質問が発せられた。

工場の製品は、自動車の基幹部品用の鉄が60～70%を占めており、顧客に迷惑を掛けられないことや社会的な責任を果たすことなどから、融資を受けてでも操業を再開すると決定したこと、全国の事業所に応援を求め全社一丸となって再開に努めたこと、一部の管理職以外はすべて地元採用の社員であり、工場が再開しないと雇用に重大な危機

が生じること、そうしたことから求心力やモラルが高いこと、といったことが説明された。

日本のものづくりを支えるハイテク素材・部品メーカーが、韓国への投資を加速している。韓国メーカーは急速に世界シェアを拡大しており、安定した販売戦略が描ける上、ウォン安、欧米との自由貿易協定、電力をはじめとするインフラコストの安さなど、日本の国内ものづくり産業が直面する多くの阻害要因がない、という魅力となっている。

しかしながらわが日本も、災害への緊急対応や復興など、いざ方向が決まれば、チームワークや現場力を発揮して、すさまじいパワーを発揮する。これ以上の産業の空洞化を阻止し、日本での雇用を維持するため、新成長戦略の着実な実行による成長産業への事業構造転換、震災後の新たな資源エネルギー政策の確立、社会保障・税の一体改革における社会保障の姿の明確化などにより、安心して暮らせる国づくりに邁進し、日本人の誇るチームワークが発揮できるようにしていかなければならない。2012年闘争も山場を越えたが、労使が創り上げてきた定昇制度やたゆまぬ「人」への投資が、ものづくり日本が誇るチーム力・現場力の源泉であることも再認識しなければならない。



津波で乗り上げた巨大な貨物船。
IGメタルの代表団と共にJFE条鋼・仙台製造所にて。